

## 形容詞の論(その二)

——語尾「し」の發生——

折 口 信 夫

文法上に於ける文章論は、非常に輝かしい爲事の様に見られてゐる。其が、美しい關聯を持つて居る點に於いて、恰、文法の哲學とでも言ふ様に、意味深く見られてゐるやうだ。私は常に思ふ。文章論は言語心理學の領分に入れるべきもので、文法から解放せられなければならない。文法は結局、形式論に初つて形式論に終る事を、覺悟してかゝらなければならないのである。總ての學問のうちに、最實證的でなければならぬ筈の文法にして、而も精神分析に似た傾きを持ち、その過程に於いて理論的の遊戲に墮するものが殖えて來たのも、この文章論の態度が總てに及ぶからだと言ふのである。此處にかうした平生の考への一端を漏すのは、外ではない。單語の組織の研究が、結局は文章の體制に就いての根本的な理會を與へるものだ、と思ふからである。

形容詞の發生を追及して行く事は、同時に、日本文章組織の或一面の成立を暗示する事になる

だらうと考へるのだ。國語に於ける所謂、形容詞の生命を扼するものは、その語尾なる「し」である。

かなし妹　　めぐし子

くはし女　　うまし國

かたし磐　　まぐはし兒る

とほくし高志の國

うらぐはし山 (? 浦妙山會)

かうした熟語の形は、後世までも影響を残して居つて、日常語のうちにも、擬古的表現を用ゐるものには、時々現れて來る。けれども、大體から言へば、我々の持つて居る後期王朝の用語例を基礎として、若干その前後の時代のものを包含した文法に對しては、やはり時代を別に劃した方が適切である。端的に言へば、私は最近まで、この「し」を以て語根の一部分と見てゐた。即、今述べた文法時代の、更に今一つ前の時代に、語根體言として用ゐられ、又眞實に感ぜられて居つたものが次第に、かうした「し」の部分だけを、その屈折と見做す理會が嵩じて來て、一種の用言觀念を生じて來たもの、と言ふ考へを、久しく固守してゐた。唯、わが古文献は、先に述べた文法

時代のうち、第三期の材料は非常に多く残つてゐるに繋らず、第二期既に尠く、第一期に至つては、恰化石の散列から有形を想像するより外に方法がない程、材料が残つてゐない。さうした間から我々は、まづ語根の末尾に「し」或は「s」に似た音を共有した多くの例を見いださなければならぬ。處が、我々の探求する事の出来るものは、單に形容詞の語尾か或は語根の屈折したものかの判断にすら、迷はなければならぬ例があるに過ぎない。其で、私はこの側の主張をさし控へると共に、どうしてさう言ふ考へ方をせねばならなかつたか、と言ふ徑路を示す事が、もつと新しい考へを形容詞の語尾の研究に與へる事になりさうに思ふ。

私は動詞・形容詞に通じて、語尾發生の規則らしいものゝあるを考へてゐた。其は、語根の尾音が子音であつて、その屈折が母音を包含する様になる。譬へば、動詞に於いては、「う」列音を派生する事に依つて、まづ終止形が出来る。さうして、更に自由な屈折が、所謂總ての活段を意識せしめるまでにくり返されたものと見てゐた。さうして此は、尠くとも動詞に於いては眞理である。今におき、この考へを私は變へる必要を認めてゐない。だが、其と共に私は、形容詞の成立にも、同じ原因のあるもの、と考へたのであつた。だが、その爲には、幾歩を譲るとしても、形容詞語尾「し」を意識する爲には、或種の事情を共通した「s」音で終る語根のあつたその理

由を知らなければならぬ。其と共に、動詞の場合に稀に「i」音で屈折するものがあるにしても、多くは「u」音であるに拘らず、形容詞に於いては「i」音である訣と、「i」音がどうして附着して来たかの説明が在る訣である。處が我々には、まだ理會せられない所の或法則的に用ゐられる「し」がある。

イ、 とこしへ 　　かたしへ

ゐにしへ

ロ、 いまし(く) 　　けたし(く)

しまし(く)

ハ、 やすみしゝ 　　いよしたゝしゝ

あそばしゝ

此等の「し」に就いて、或ものは所謂接尾語、或は緊張辭、と言ふ風に説明して行けるであらう。併しながら其は、文法的の分類でなくて、修辭的の區劃である。このうち(ロ)の例は、我々の持つてゐる形容詞語尾の感覺に近いものであつて、活用完成の徑路には、必經てゐる姿であるに違ひない。(イ)は、文法的語感の持ち方に依つて違ふ所もあらうが、大體に於いて、領格「つ」

を以て代入出来さうに、現代の感じでは思はれる。即、いにしへのしは、單純に過去の助動詞と探るべきではなからうと思ふが、其を拒む理由もまだ立たない。かたしへの方になると、かたしだけでは熟語であり、體言の感覺を持たれて居つた痕跡はある。とこしへなどは、とこづへと言ふ形を假想して見ると、とことはなる詞の形が訣りさうである。ともかくもこの一群に於いては、の・が・つに近づいてゐる事は明らかである。(ハ)の例に於いては、總て單語に着くと言ふよりも、句に續くと言うた感じを持たせるが、結局はその詞自身が長く、その上に、詞に曲折の多い爲に、さう感ぜられるだけである。

いよしたゝしゝ……弓

やすみしゝ……おほきみ

あそばしゝ……しゝ(?)

つまりは、音脚の制限を受けた律文の中にあればこそ、熟語としての感覺が乏しいのに過ぎない。たとへば、

へびはし(名細) よしぬのやまは、くもるにぞ、とほくありける

を例によつて見る。かう言ふ場合、枕詞の格として、我々は常に、其連續について問題としては

ぬない。なぐはしとよしぬとの間には不即不離の關係があるのだと言ふ位に考へてゐる。此即、文法に氣分觀を容れるからの間違ひである。おなじ詞でも、古用語例を延長したもの、たとへば、「名細之ナグハシ さみねの島の」と言つた例になると、よし野と謂つた様に適確に名細しと言ふのでなく、唯漠然と名の感じがよいと言ふ位に轉じてゐる。つまり單なる地名のほめ詞なのである。此と「名細寸ナグハシキ いなみの海のおきつ海」と言ふのと、どれ程の差違があらう。

この三つを並べて見ると、古格と古格を辛うじて守つてゐるものと、新しい感覺に従うて文法を整頓したものとの間に、自然な通じるものが見られる。最進んだ枕詞論者は、語句の固定によつて、枕詞としての感覺が出されてゐるものと言ふであらう。だが、眞實、「なぐはしよしぬ」と「なぐはしき いなみのうみ」との間に時代的發想の新舊が見られるだけではないか。唯、前者ではよしぬとの關係の深さは見えるが、後者は「の海」まで、なぐはしきの効果の及んでゐることは確かだ。

枕詞と言はれ、又さう扱はれてゐないものゝ中でも、特別なものを除けば、實は分類の不正確なものに過ぎなかつた。だから、前にあげた「やすみしゝ」が枕詞であつて、自餘の物がさうでないなど言ふのは、唯の習慣の問題に過ぎない。更に此癖は、熟語かどうかと言ふ感じをさへも、

鈍らしてゐるのである。

今一度方面をかへて(ハ)の例について物を言ふなら、「やすみし」などの上の「し」は敬語の助動詞に屬すべきものだ。こゝにも問題があるので、「……さす」・「……しす」など概括して古代風に感じられる敬語法では、上が唯ずると言ふ動詞で名詞についたもの、下が敬語的屈折を作るものと言ふ風に理會せられる。昨非今是まことに面目ないが、單に朝令暮改と笑殺されてもさし支へない。私は、今敢へて上の「し」を敬相、下の「し」を、尙多くの隈を含めながら、熟語を構成する一つの形式的要素と見ようと考へてゐる。

枕詞と云うても、いろ／＼あるが大體に、枕詞と感じるだけの約束がないでもない。ある一つの約束は、一つの固定した格を作つて、外の語と紛れぬ様になつてゐることだ。こゝには其について、一々述べないが、この場合の問題の「を」なども其だ。「けごろもを……はる冬」「みはかしを……つるぎ……」「みこゝろを……よしぬ(イ)の如き、近代の人の文法的調節によつて感じる所の、御心よ……み佩刀よ……褰衣よ……など言ふ形は、確かに萬葉時代にも其通り考へてゐた時期はあつたらしく、其と共に、既に此「を」を以て目的格の指辭と見るに傾いたらしい例は、ぼつ／＼ある。「わぎもこを……いざみの山(は)やみ濱……」「いもがてを……とろしの池」「たちは

なを……もりべのさと」(口などは、辯疏の餘地は、多少あるとは言へ、意識が移つてゐると見るのが、本道らしい。(イ)と同じ傾向で、其成立の時代の、更に古くとも新しくない「うまさけを……みわ」が「うまさけの……みわ」、——殊にこの例では、うまさけ・うまさけを・うまさけのと言ふ三階段を併せ持つてゐる。——と言ふ形があり、「はるびを……かすが」に對して、日本紀では、「はるびの……かすが」の形が存してゐる。「をとめらを……袖ふる山」は、又同じく萬葉に「をとめらが……袖ふる山」となつてゐる。

かうして見ると、枕詞の格と言ふべきものは、固定を保つてゐるものではなかつた。「を」が所謂後世式の感動のてには、らしい職分は、畢竟やはり後人の感覺で、熟語化する爲の辭と言はな  
いまでも、其以外の方面に導く爲の語ではなかつた訣である。其が、新しい意識を派生して、目的格の様な形に考へ、其に該當する叙述語らしいもので、枕詞の職能を完成させようとする様にもなつた。が、此は、「を」と言ふてには、全體に行き亘つた要求で、感動から目的に出て行かうとするのが、萬葉に見える用語例の過渡期である。一方考へれば、この「を」は、だから、感動のてにはでもない。唯、ある固定を保つことによつて、其に續行して來る部分の、修飾語の様な形をとらう、としてゐることが知れる。即、「の」と代用せられてゐる所以である。

だから、體言的であればあるだけ、又句を跨げると言ふ修辭上の簡單なる制約によつて、熟語を作る筈の二語の間の性能は、隔離せられるものではない。

處が、かうした語の形にわりこんで來る言語情調が、之を説明して、噓し詞式の意識を持たせる。此は單に根據のない併し、又同時に新しい文法を形づくるところの氣分であつて蔑にすることは出來ないが、この場合大きな惑ひを惹き起すことがあるから注意をせねばならぬ。

又かうした説明からは、この「を」が、當然あつてもなくても、文法組織に動搖がない様にはれて來る。もつと端的に言へば、「うまさけ……みわ」と言つてすんでゐた。其に聲樂的の要素がわり込んで來たものと言ふことが出來る。此は、勿論忽に出來ないことなので、此まで、文法家が、其引用の大部分に律文及びその系統の文を引いてゐ乍ら、此文法を規定してゐる大勢力を無視してゐたことは、反省すべき所だ。實際において感動とも、噓し詞ともいふべき地位にあるもので、これを今すこし言ひかへて見る必要がある。

あなにやし　よしゑやし

あをによし　やほによし

などを省ると、これを我々の頭で、單純化して見ると、「あなに」「よしゑ」「あをに」「やほに」

である。この場合などは、此古典的な語の性質上、其から其用例の習慣から、弊樂上の約束を考慮に置かぬ訣にはいかなない。さうして、之を分解して還元すると、

あなに よしゑ

あをに やほに

である。第一行と第二行とでは、大分部類の違ふ様だが、形式問題からは一つに言へる。假りに「やし」・「よし」を囉し詞のやうに見ることも出来る。而もこの「やし」「よし」の間に長い歴史があり、其だけに又、用語例の上に展開と、誤解を包んだまゝの變化があるのは勿論だ。「あなにやし」「よしゑやし」では、時代に開きはあるが、用語例は古風を傳承してゐるものと見られる。「あをによし」も大體、「やほによし」の用語例からさのみ分化してゐるとも見られないが、其でも尙、「玉藻よし」「麻裳(?)よし」「ありねよし(?)」などのよしと共通に、意義が新しい理會によつて、移らうとする部分の見える事は確かだ。我々は先輩以來「よし」や「やし」の性能を少し局限して考へ慣らされてゐる。だがまづ、かう言ふ例を考慮に入れる必要がある。

おふをよし しびつくあま(紀)

たれやし ひとつも……(紀)

大魚(オウゴン?)なる鮪或は、誰なる人(即誰人)と言ふ風に今の語に翻(クワ)して言ふことが出来る。もつと簡單に、大魚鮪・誰人と言うて、尙よいところだ。同時に、「よし」「やし」がなくとも、意味の通じるものである。即、熟語過程を示す語に過ぎないのだ。

擬一例「よしゑやし」をとつて考へて見る。之を「よしゑ」と言つても、聲音の上で關係の深い形に直して「よしや」と言つても、大體において、形式と内容上に違ひがない。或は「よし」と言つても同じことゝ謂はれる。さうして此等は、一々擧げるまでもなく、例證の豊富な語である。結局語その物ばかりに就いて言へば、語根よしと言ふ形に復して、用ゐられる訣なのだ。

はしけやし (はしけよし 紀)

はしきやし (はしきよし 萬)

かう言ふ例になると、大體において、「け」と言ふ音の過程を含んだ方が古くて、「き」と言ふ音に直つてゐる方が新しい意識を以てゐるものと考へられる。此とても、古い語形と新しく調節せられたものが並用せられる例である。つまり、「はしけ」或は「はしき」と謂つた連體感覺を含んだ語に、「やし」「よし」がついたので、語根に其がついた時代から見ると、稍新しいと見ねばならぬ。此とても、枕詞の一つとして考へられてゐるものだが、其かゝる所は、妹・君などから

延長して、家・國・里などにもかゝり、更に幾句かを隔てゝもかゝる様になつた。其上、鍾愛・未練・執着の心持ちをこめて言ふ時の一種の獨立語の様な用途をさへ開いて來た。併し乍ら其は、内容の上の問題で、形式から言ふと元來、「はしき……妹・君・家」など言ふ接續ぐあひのはつきり訣つてゐたものであつた。たとへば、「はしき妹」「はしき其君」とでも、言へるところである。尤、「其」と言ふ語は、便宜上挿入したゞけで、決して、「し」などに「其」の義があるとは考へてはゐないのだ。

かうして考へて來ると、我々の所謂連體形なるものは、存外文法的に有機的なものでなかつたに違ひない。單綴語における、接近した二つの語とおなじ關係に似たものがあつたらしいのである。にも繋らず、かうした明らかな、屈折以上の連結のあるものがある。

「石見のや……高角山」「みなとのや……荻が中なる」「淡海のや……鏡の山」に於いても、同様なことが言へる。此「や」は聲樂上の氣分には、内容があつても、論理的の意義はない。又更に、伊加奈留夜人にいませか(佛足石)、「如何有哉人の子ゆゑぞ(萬十三)」「天なるや弟たなばた」の場合も、疑ひもなく、「や」は文法上の職能を示して居ない。所謂感動の「や」或は「棄てや」と稱せられてゐるものは、一種の嘸し詞と見られる理由もある程、詞の意味も持つてゐな

い様に思はれる。殊に、俳諧の切れ字として見る時は、明らかに、此辭によつて、意義が中斷せられ、そこに一種の情調を湛へるものと思はれるのだが、此も唯、習慣の推移から來てゐるに過ぎないことが知れる。

○たかしるや……天のみかげ　あめしるや……日のみかげ

○あまとおや……カクノミテ輕路……ヒレカケレ領巾片敷き……鳥

○あまてるや……日ヒのけに(あまてる……月)

○おしてるや……なには(おしてる……なには)

#### 第一類

○をとめの寢ナ(鳴)すや板戸

○ゆふづくひ指サスヤ也河邊

○さをしかの布須フスヤ也くさむら

○さぬやまに宇都ウツヤ也斧音ノト

#### 第二類

○かしこきや(恐也み暮仕ふる。……可之古伎夜みことかとふり。……惶八神の渡り)

○うれたきや (宇禮多伎也しこほとゝぎす。……慨哉しこほとゝぎす)

第三類

大體この様に三部類に亘つた「や」の用法について、今一應、おなじことをくり返して見たいと思ふ。第一類は、萬葉當時既に枕詞としての意識は持たれてゐたに違ひないが、尙單なる用言の連體形の様な感じがある。其について、「や」を附加することによつて、様式上の連體状態を中斷し、而も内容において、連體性能に何の變化もなからしめてゐる。と同時に、音律感覺の推移から來る不足感を十分補はしめてゐる。さうしてかう言ふ自然の方法が、新しい連體職能を構成すると共に、枕詞として獨立した格の感じを成立せしめようとしてゐるのだ。

第二類になると、句が修飾部の様になつてゐるので、「や」の職能は、更に發達し、文法的機能<sup>能</sup>が張つて來た様子が見えるのだ。

ところが第三類には、右に言つた用語例の外に、特殊なものゝ加つて來てゐることが見られる。

(4) ○……やすみしゝ我おほきみの 恐也みはかつかふる山科の鏡の山に……

○可之故伎也天のみかどをかけつれば、哭のみし泣かゆ。朝宵にして

○可之古伎夜みことかゞふり、明日ゆりや、かえかいむたねを いむなしにして

(B) ○……海路に出で、惶八神の渡りは、吹く風ものどには吹かず、立つ浪もおほには立たず、頻波シキの立ち障サふ道を

○……海路に出で、吹く風も母穂には吹かず、立つ浪ものどには立たず恐耶神の渡りの頻浪シキのよする濱べに、高山をへだてに置きて……

又、(A) ○……うれたきやしこほとゝぎす。今こそは、聲の干蟹ヒルカニ、來鳴きとよまめ

(B) ○……こゝだくも我が守モるものを。うれたきやしこほとゝぎす……追へどく尙し來鳴きて、……徒らに土に散らせば……

尠くとも、(A)に屬するものは、明らかに「かしこき……」「うれたき……」と言ふ風に、熟語の形を採つてゐるものと見られる。其に對して、(B)のものは、さうした單語を修飾するといふよりも、その効果が、他にも及んでゐる様に見える。即、「かしこきかも」「うれたきかも」に近づかうとしてゐるのである。此事から更に翻つて見ると、「はしきやし」に關する數多の用例が、元は、熟語を作るものに過ぎなかつたのが、次第に、間隔を置いて對象語にかゝる様になり、更に文章全體に効果の及ぶやうになつた訣が見られるのである。

- (a) 伴之伎(?) 與之 かくのみからに、慕ひ來し妹が心の、すべもすべなさ
- (b) 波之寸八師 然る戀にもありしかも。君におくれて戀しき、思へば
- (c) ……里見れば、家もあれたり。波之異耶之 かくありけるか。みもろつくせ山の際に咲く花の……

(d) 早敷哉 誰が障ふれかも、たまぼこの 道見忘れて、君が來まさぬ(はしきかもとも聞ひべきか)

(e) 級子(寸?) 八師 吹かぬ風ゆゑ、たましくしげ ひらきてさねし我ぞ悔しき

此等の例は、すべて、連體に似た形を示して居ないばかりでなく、句を隔てゝも修飾してゐるとは言ひにくい様だ。(a)はまだしも、妹が心にかゝつてゐると言へば言へるが、其とて、全體に對しての叙述だと言ふ方が適切だ。(b)(d)に於いては、殊にさうした様子がよく見える。(c)(e)になると、完全に離れきつて了うて、唯はしきやしと言ふ語の習慣が、氣分として用ゐられてゐる風に見える。

結局かう言ふことの起るのは、言語に對する人間の合理性によるのである。古い文法が固定し、次第に正確な理會を失うて來る。而も其形式を襲うて行くことは止めない、さうすると、唯、確かなものは、人々が受ける時代的情調である。これを分解しながら、新しい文法意識を組み立て

ゝ行く。さうすると、第一義とは非常に離れたものになる筈である。殊に、文學作品の上の川語として使はれた場合は、言語選擇機能が働くだけに、一層甚しい。はしけやし（はしけよし・はしきやし・はしきよし）の場合などは、最遅くまで、其俵を留めた一例で、一方多くの「やし」は、殆ど決定的に、「よし」に變化して、單なる地名を想起せしめる、所謂枕詞の格の助辭の様な形に、統一せられて來てゐたのに、此だけは尙、ある理由の下に残つてゐて、古い氣分を保留し乍ら用ゐられてゐた。我々はこゝに熟語を作る語の語尾が、其接すべき語から自由になつて、而も其文章なり句なりに、勢力を及し、表現性能を擴げて來る徑路を明らかに認めることが出來たのだ。其が同時に、用言式に言へば、連體性のもので、終止形風に獨立せしめることになつたのである。

○

「はしきやし」は、かうした一類の中、最特殊な用語例を示したものであるが、尙先にあげた、「あなにやし」「よしゑやし」を見ると、似た處を見出す。「よしゑやし」の「よしゑ」は、「よし」と「ゑ」とが分割出來るものに相違ない。形容詞・動詞の語尾につく所謂感動の語尾の「ゑ」である。今日の理會を以てすれば、「よ」と音韻の上で通じるものと見ることが出来る。だから、

或は「よしゑやし」の場合、同じ價值を持つ「ゑ」と「や」とが、重疊せられたものではあるまいか。

世の中は、古飛斯宜志<sup>コヒシケンケンエヤ</sup>。かくしあらば、梅の花にもならましものを

この第二句を「戀しけしゑや」「戀ひ繁しゑや」「戀しけしゑや」何れにとる事も出来る。だが、何れにしても、ゑ・やの結合状態は、暗示せられてゐる。而も、更に見られるのは、文法の固定作用から、「しゑや」と言ふ一つの形式の生れて來ることも、見當がつく。萬葉に残つてゐる「しゑや」は、此一例を除くと、殆、形容詞を承けた痕は見えない。獨立した感動詞・副詞の様な形をとつてゐる。だが、もつと古く形容詞に結合する習慣が固定して、更に遊離して作つた成句と見られる。

「あなにやし」も分解すれば、「あなに」が出来るが、此は、「あやに」(語原は別だが)に通じる「あなに」である。この「に」に特殊な意義があるのか、今日では考へられぬ。唯、「あな」も「あなに」も、語尾の有無の相違だけと見られるので、「あな、えをとこよ」の義に説ける。此「に」は副詞語尾であると共に、古くは、語根「あな」を品詞化するもので、更に其に用言的機能をすら與へてゐたのだ。「櫻の花のにほひはも。あなに」などを見れば、「ゑ」と價值は變ら

ない。此「あなに」に更に「ゑ」のついて、「あなにゑ」の形が出来、その間に或は、あなにや(神武紀、「研哉」此云「映奈珂(惠ナシ)夜」)となつたらしいものもあり、「や」がついて、「あなにゑや」にもなつた。一方亦あなにゑ(あなにや)に「し」のついた形から音韻變化で、「あなにやし」が現れたのだ。かうした「ゑや」の過程を踏んで、「し」を呼んだ形が、「よしゑやし」である。

「あなにやし」「よしゑやし」の類は、語の歴史としては、比較的に古いまゝに固定して、後まで残つたものであらうが、用法から見ると、新しいものに似た所がある。だが其は、全く變つて居て、まだ文法上の拘束を受けない、語根時代の俤を示してゐるもの、と見ねばならぬ一群の語句に接して行くものだつたのが、段々其自身の内容が限定せられて來た爲、他の語に續く形まできまつた訣であらう。

「やし」「よし」が完成した語尾の様に見えるのも、かうして見ると、單なる無機的の修飾語の一部に過ぎないことになる。さうして其上に、「し」が緊密に「や」「よ」に接してゐるものではないことが知れる。

○ 射ゆしゝをつなぐ河邊の若草の(紀)

……………認河邊の和草の(萬)

○はるがすみ春日の里爾<sup>ニ</sup>殖子水葱

上つ毛野いならの沼爾<sup>ニ</sup>宇恵古奈宜

今日我々の持つ時間觀念を含まずに、此に似た熟語を作つた場合は、澤山ある。必しも「射られたるし」。「栽<sup>ニ</sup>えたる水葱」と言ふまでもない。殊に、前者の如きは、古代歌謠の上の一つの成句として、屢流用せられたものと見ることが出来る。だが、後の例になると、殖槻・植竹の類の成語はあつても、其とは別に稍、今人の文法觀念にそぐはぬ處がある。或は、地理に關した特殊の「に」の用法からして、「なる」と言ふ風に感じる人もあらうが、此はさう言ふ場合ではない。即、「春日の里に栽<sup>ニ</sup>うる……」「いならの沼に栽<sup>ニ</sup>うる……」と言へば、多少の妥當性は缺けてゐても、我々には訣る。其とおなじ用法なのだ。更に言へば、時間觀念を挿入すれば、もつと適切に感じられるところだ。さうした方法をとらないところに、偶、この語に限つて古い文法様式を保存してゐる痕が見えるのだ。謂はゞ、律文としての偶然な制約が、重つて來た爲である。

山縣に麻岐<sup>マキ</sup>斯<sup>シ</sup>あだね搗<sup>ウ</sup>き、染<sup>ソ</sup>め木が汁に染<sup>シ</sup>め衣を……

などの場合にも、偶々さうした表現法が残つて見える。即「染<sup>シ</sup>め木が汁に染<sup>シ</sup>むる(或は染<sup>シ</sup>めたる)

衣を」と解けば、氣分的に納得するのだ。奈良朝頃の文獻の中で、かうした形を發見するのは、多く序歌の場合である。つまり、氣分的に解説すれば、ある契機となる語を中心として、二つの觀念の轉換が緊密に行はれてゐる。其爲に文章又は句としては、不自然な處が生じるのだと言ふことになる。だが、さうした技巧も、元は技巧としてはじまつたのではない。唯古の表現法に準じてゐたのだ。さう言ふ點に、後代の文法意識が働くと、前句と後句との間に、緩衝的な語を挿入することを考へて來る。謂はゞ「ところの」と言ふ程の意識を含めるのである。二つの句の間と言ふよりも、前句を後句から隔離し、半獨立の姿を保たしめるのである。

……あたねつき染め木が汁に染め 衣を……(シムルトコロノ衣)

上つ毛野いならの沼に栽ゑ 小水葱……(ウ、ルトコロノ小水葱)

右の例における接續點は、前代の文法及び、其形式を襲ふものでは問題にならないが、やはり次第に、整頓せられて來る。假りに序歌を以て説くと、

ますら雄のさつ矢たばさみ立！わかひたらイ！ち！いるやまとかた向ひ射る間方！は見るにさわやけし

「伊勢風土記逸文」では、序歌の契機點に「や」を挿んで、緩衝してゐる。かう言ふ風に、言ひ改められるのは、理山のあることで、「に」「の」「も」「なす」など言ふ辭を挿むのは、序歌として

は、第二義に屬するものと言ふことが出来る。序歌の場合は、上の句を比喻化（或は類音化）して、意義を轉換させるのだが、其と共にさうした挿入辭によつて、つき放してゐる。ところが、前の場合は、挿入した辭によつて、前句を固定させると共に、後句と接續させる様になつた。即ち「あなたにやし」「よしゑやし」「はしけやし」「やすみしゝ」「いよしたゝしゝ」などの、比較的短い語を繋ぐ用途の、意識せられてゐた「し」が、割り込んで來る事になつたものと見られる。かうして見ると、我々は古文獻に見える「し」について、考へ直す必要が生じる。

奈良朝の古典で、而も其前代の言語傳承を筆録した部分の含まれてゐる多くの詞章に現れて來る、此類の「し」についてである。今泉忠義君は、既に（昭和五年十月號國學院雜誌）「助動詞きの活用形し」の考へ」と言ふ論文で、過去の「し」の用例の記・紀の歌謠に現れた分を整理して、其成立を考へようとして居る。さうして其が、代名詞「其」であらうと言ふ假定に達してゐる。可なり暗示に富んだ優れた考へである。私としては、其同じ用例を反覆して、過去の助動詞は勿論、出來るならば、形容詞の語尾の暗示を惹き出して行かねばならぬのである。

みつくし 久米の子らが垣もとに栽ゑし はじかみ 口ひやく……

この例に、「うゑこなき」の歌をつき合せて見ると、「垣もとに栽ゑはじかみ」と言うてもよい處

だつた事が知れる。

ありぎぬの 三重の子がさゝがせる みづたまうきに 浮き し 脂 落ちなづさひ みな  
こをろくくに……

の場合も、瑞玉ミツタマの同音聯想として、浮きが出て、浮き脂と續くところを、「し」を挿入してゐる。此歌の此部分は尠くとも、神代卷のおのころ島の段と、おなじ傳承の記憶から出來た文句に相違ない。浮きし脂と言ひ、こをろくと言ふ點、新しい發想でないことを示してゐる。即瑞玉に浮き脂……とも言へる所だ。又、前に引いた一つの例の、

○山縣にまきし、あだね搗き、染め木が汁に染め衣を……

○やすみし、わが大君のあそばし、しゝの（病み猪の）うだき畏み、わが逃げのぼりし、  
あり丘ツのうへの榛ハシの木の枝（榛が枝あせを）。あせを、

前者はやはり、「山縣にまきあだね」と一つことゝ説くことが出来る。後の例になると、記・紀共に「し」としてゐる。此になると、今日知れない特別の事情の明らかにならぬ限りは、既既に時の觀念らしいものを含んでゐると言はねばならぬ。假りに、合理化を試みると、「この榛や、いづくの榛。やすみしゝわが大君の……わが逃げ登りし……榛の木の枝」と言ふ様な形だつたもの

で、咒物の由来を説くと共に、「し」に詠歎を含めてゐるらしくも見える。ともかくも「し」は、過去と言へないまでも、職能は變化してゐる。此と似た縁起を説く歌としての

この御酒は、わが御酒ならず、くしの神 常世にいますいはたす少御神の神ほき ほきく  
るほし、豊ほき ほきもとほし まつり來し御酒ぞ……(記紀)

やはり「し」には、詠歎と讚美とが、籠つてゐるやうだ。つまり、感情をわりこませてゐる訣だ。

○つぎねふ 山代女のこくは持ち、うちし大根 さわくに……(記紀)

又、うちし大根 根白の白たゞむき(記紀)

○須々許理がかみし御酒に……

此も詠歎とも言へるが、「うち大根」と言ふ風に説ける。

○櫃の原によくすをつくり、横臼に醗みし大御酒……(紀、かめる……)

○をとめの床のべに、わが置きし劔の大刀……

○おきつどり 鴨どく島にわがゐねし妹は忘れし……

此等の例では、「に……し……」と言ふ形式も具へてゐるし、「し」の挿入せられた形跡が、まだ

伺はれる。

……わが哭くつまこそそは、易く膚ふれ（記紀）

許存許會を、許布許會の誤りだとしてゐるが、日本紀も去歸去會となつてゐるのだから、「こそ」でよい。此が、下に「ふれ」（四段形）と第五變化で結んだものと見れば、其までだが、尙考へて見る必要がある。「こそ」の係結の完成する前の形で、「わが哭くつま。昨夜こそは、易く膚觸れ 妻」と言つた形らしく思はれる。つまり、膚觸れし妻と言ふ義である。若し、此が單に「膚觸れし」と言ふだけに止るのでも、「し」と言ふ過程の豫期せられてゐることが見える。

まさしに知りて、我が二人寢し（萬）

やはり、同じ舊事を説く歌だが、前の歌の様に言ふなら、「わが二人いね（又は、あね）」でもよい處だ。恐らく此場合は、「我が二人寢し我が」といふ形だらう。「易く膚ふれ」と「わがゐねし」とを並べて考へれば、「し」の出て來る氣分が知れると思ふ。さうして見ると、榛の木の歌も、「猪のうだき畏みわが逃げ登りし猪のうだき」と解すべきで、「ありをのうへの榛の木の枝」は、所謂囃し詞に屬すべきものかも知れぬ。先に出た倭建命の歌と、其事情の似たものを、二つ連ねて見ると、

をとめの床のべに、わが置きし劔の大刀。その大刀はや。尾張にたゞに向へる尾津の崎なる  
一つ松。あせを。……

即、榛の木の歌と、様式上に非常に近似性を持つてゐることが知れる。

過去表現に關しては、尙説かねばならぬものが多いが、今は其形容詞語尾と、發生徑路を分化する以前を説くに止めねばならぬ。何にしても、「し」が時間意識を出して來る過程には、詠歎と、回想とを加へて來なければならなかつた。さうして更に、形容詞語尾と、明らかな差別を出すためには、熟語を構成する事から、解放せられねばならなかつた。併し一方、形容詞も亦、外見から言へば、獨立した形を作らうとした様に見える。だが結局、此方にはやはり、最初の姿が残つてゐるのである。

○  
考へ方によつては、過去の「し」の起原は、一種の囃し詞の様にも見える。又、一時的には「其」のわり込みとも見ても濟む。だが、囃しと見るのは、其後代的氣分から出るものだし、「其」と見るのも、或は却て順序顛倒して、「し」が固定して、「其」の感覺を起す様になつたのかも知れない。要するに言うてさし支へのないのは、一種の連體法を作る語尾だと言ふ事である。さうして

其「し」は、同時に形容詞語尾をなしてゐる「し」とおなじものだ、と言ふことの推定に近づいて来る。

「やすみし十の」「あそばし十の」「いよししたし十の」が、「やすみし」「あそばし」「いよししたし」で現されたものとすれば、萬葉卷二日竝知皇子尊舍人等歌の三つまである御立爲之の句は、「みたしし」と訓まらずとも、「みたし」と言ふ舊訓のまゝでもよいかも知れぬ。意義は同じ、古風だからだ。又、古事記の古訓に、無制限と見えるまで、宣長翁の訓まれた動詞に敬語「み」をつける癖（三矢先生改訓）「み……し」とある部分だけは、見免すことが出来ると言へるかも知れない。又、古風だけに、「やすみし」以下の例と同じく訓むのが本道らしくも思はれる。但其場合も、決して翁の考へに含まれてゐるらしい「み佩かし」などの「し」を過去とすることは、何處までもいけない。實感は實感でも、近代の文法意識と古代のものとは違はなければならぬ筈だ。「し」から過去を感じ馴れてゐる我々が、「やすみし」「あそばし」「いよししたし」を過去と感じ、又「裁えしはじかみ」「まきしあだね」に、時間的に所置しようとする心が動いても、其は古代の文法からは、没交渉なものと謂はねばならぬ。さう言ふ例を今一つ、「名細之」によつて説いて見よう。この例が若しもの確でなくとも、さうした類型は、外に

澤山ある訣なのだ、と言ふことを言ひ添へる。

我々は、「くはし」と言ふ讚美の語を知つてゐるから、古人が「くはし」を細し(美)と感じた事に不審は抱かなくなつてゐるが、なほ吟味すると、偶「くはし」と言ふ語のあつた爲に、其をすべて「美」の範疇にいれて考へたとも言へないではないか。

……朝日なす目細毛、夕日なす浦細毛。春山のしなひさかえて、秋山の色なつかしき……  
うらぐはしは、「うるはし」の語原だとの説もあるが、ともかくも、美意識が動いてゐることは事實だが、稍自由である。「花ぐはし櫻のめで」「香ぐはし花橘」など言ふ成語に挿まれた「くはし」も褒め詞の様に見えるが、尙考へる餘地がある。「くちら」にかゝると見られる「いすくはし」などは、「勇細し」などで解くのは、如何にも固定した方法を思はせる。つまり「やし」「よし」など、用語例の似た、「はし」のあつた事が思はれるのである。其が合理化せられて、「細し」の一つの例に這入つてゐるが、かうした「し」は、外にもいろいろあつたことを考へさせるのである。言換へれば、「やし」「よし」と一類の「はし」があつて、其が偶然、「くはし」と言つた形と結びついた事を思はせるのだ。かう言ふ過程を踏んで、古い組織が、新しい語の組み立て方に、引き直されて行つたものゝ多かつたことが思はれる。

唯此までの「し」で考へられることは、すべて、説明すれば、わり込んで来たものと思はれるものだつた。ところが、日本語の語根時代の俣を見せてある、と思はれる語には、語根の中の一部と言ふより、語根その物と見られるのがあることだ。

おし をし

もし けたし

いまし しまし

神代卷以下まだ、神代の匂ひの失せない時代の記事を見ると、押・忍或は壓の字を上に据ゑた熟字に逢著することが多い。

○天押帶日子命 押阪連 押媛 押木玉瓊

○忍熊王 天忍人 忍穂耳命

○天壓神

此等の、澤山の「おし」の中、唯天壓神の外、殆例を見ない程、「おし」は「大」オホ或は「大きし」に通じるのである。此事は、宣長も古事記傳に論じてゐる。が、此に對照して考へると、「をし」の意義は稍明瞭である。古事記・日本紀の古訓などには、此「をし」を形容詞扱ひにして、「をしき」

と言ふ活用を出してゐるが、此はうけ取れない。「愛」の義にとるべきではなくて、あるものは悉く「惜」の側に入るものだ。「をし(惜)」「をしむ」から還元して「をし」を「愛し」と感じることは、決して古義を溯源することにならない。たとへば、萬葉古義以後、ほとんどの通説の形をとつた「三山歌」の、「高山波雲根火雄男志等」の上の雄を目的格の「を」として、下の男を志につゞけて「をし」即「愛し」と訓む風は、意味をなさぬことになる。即語根としては意義はあるが、成語としては意義をなさない。「をし」は恐らく屈折を生じて「をし(惜)」「といふ形容詞になつて、完全な意義を生じたと思はれる。だから、古代の「をし」の用語例は、必しも「惜」でなく、大切・大事など言ふ、

○あたらしき君が老ゆらく惜毛ワシモ

○劔大刀 名の惜毛われはなし

○君が名はあれど、吾が名之惜毛

などの「をし」その他は、唯の「をし」で解せられるが、よく考へれば、大事と言ふことである。つまり、用語としては、さうした語原的の意義を一部分表して、後の用語例どほりでないものも出来たのだ。「をし」に珍重する意義を失はなかつたのだ。唯、語根の様な形で、他の體言や、用

言と熟語を作つた時、特殊な内容を醸し出したものと思はれる。かうした「おし」「をし」が、更に分解して、「お」「を」になることは知れる。即我々の既成概念を以てすれば、大・小である。

「お」「を」から直接に熟語を作つてゐる「おきな」「をぐな」「おみな」「をみな」「億計王」「弘計王」「大碓」「小碓」「おぢ」「をぢ」「おば」「をば」「大忌」「小忌」などがある。

私は尙、後々から例證を擧げて行くつもりだが、もう分解出来ぬ様に見える「おし」「をし」にも、やはり接合點があり、而も此等が作つた熟語の多くが失はれて了うたことを考へるのである。唯、「おし」の方は、あゝした形の熟語と認められてよいものとして残つたが、「をし」の方は、熟語用言として形を留めたと思ふことが出来るのだ。唯此が今すこし形容詞屈折の含まれた時代だと、「をゆ」とか「をく」「をつ」「をす」とか言ふ形になるのだが、其だけの内容を「をし」が作つてゐない。「おゆ(老)」と言ふ語(新國學第二・第一號)に對して「わかゆ」と言ふ語の出來たのが遙か後の事と思はれるのである。

だから、「をしむ」或は形容詞「をし」などの場合は、「をし」の内容がある點まで擴張してゐるものと見ねばならない。さうして思ふべきは、後來の形容詞に専ら行はれる殊に久活形容詞専門と思はれる「し」を外して語尾につく形は、こゝで考へる必要がある。たとひ「おゆ」と謂つた

形があるとしても。何か特殊な理由がなくてはならない訣である。今假りに「をし」を以て言へば、私の話が、ひよつとすれば、「し」を單なる價格語尾の様な考へ方に誘うて來たかも知れぬが、最訣り易いこの術語を避けたのは、理由があつた。すべての格及び格の助辭と言ふものが、單に自然にさう傾いて來たゞけで、根本に溯ると、いづれの格にも共有の分子が多いのである。唯用法の問題である。の<sub>1</sub>が<sub>2</sub>が主格或は價格、時としては、感動をさへ示す事がある如きである。

私は既に述べもし、此書き物以前に書いた體言語尾の考へについて言ひもした様に、熟語を作る、「ら」「や」「か」或は「な」「た」の類の、語根につき、又其系統の語につく語尾は、體言感覺を作ることによつて、同時に、用言的屈折をしない語の爲の、熟語格を作つたことを述べた。畢竟、かうした語尾は、體・用兩方面の熟語を作る手引きとなつたことに疑ひはない。唯形容詞の場合、遅れて出來た「く」が、體言の場合のほか、用をなさなかつた事自身、用言的感覚を持たせる様になつた。其だけ、國語意識の變つて來たのである。

○ます・ら・男 (ますはいよと、同義語をなす健康の義の語根)

○たわ・や・め

○さ・ら・え十をとこ

○たわ・や・かひな

○ふはや・が・下

○なごや・が・下

X

○おだ(おだしく)・や・む

○すゝろ・ぐ

○そび・や・ぐ(そびゆ・く?)

かう言ふ風に、われ／＼の時代文法の意識においてこそ、**體言・用言**の間に、非常な區別をおいて考へてゐるが、古くは語根の結合などにも、かうした無差別なものがあつたのだ。

○いくばくも生けらし(石生有命乎) 命を、

○今宵のみ相見て、後は不相アズものかも

○幾時イケバクも不生物イケラジモノ乎

かう言ふ現象は、又「まし」にもある。語尾としての價值において、や・ら・た・なと、まし・まし・じなどとの間に開きのある様に考へる方々も多からうが、結局は様式論から言へば一つである。「まし」

においては、「もの」に接續するのが普通である。

○堅薦も持ちて來ましも

○岩根しまきて死なましも

○山の雫にならましも

×

○國知らさまし島の宮はも

○うちなびく 春見ましゆは

○こゝもあらまし栢ツギの枝はも

かうした結合は、近代では、皆「き」と言ふ形を俟つて行ふものと思ふであらう。「じ」「まし」などでは其がない。又おなじ範疇に入りさうな「らし」なども、「らしき」と言ふ形はありながら、眞の連體に用ゐられた痕跡はない。

○うつそみも、つまをあらそふらしき

○うべしかも。蘇我の子らを、大君のつかはすらしき (推古紀)

そのうへ、「らし」にも

○わが大君の、夕さればめし賜良之(神岡の……)、明け來ればとひ賜良之神岡の山の黄葉を。など言ふ幾分疑しい使ひ方がある。謂はゞ連體形とも言ふべき「し」の形を持った形容詞類似の助動詞で、多少とも時間觀念を含んだ類のあることに注意してよい。

同じ傾向のものに見られさうなのに、「もし」「ごとし」「けたし」がある。だけれども、私は此に就いては、特殊な考へ方を持つてゐる。

私は序説に於いて、文章法を説く事は、單語を説く事の延長と考へるのを正しとする、と言つておいた。其を、今になつて思ひ返す必要がある。此は、單なる偶言ではない。近隣諸民族の言語との比較研究から、單語序等の上に非常に考へさせられる事のあつた結果なのだ。古典的な文法と新興の文法とが並行してゐる間に、當然新興の方が正しいものと認められるだけの勢力を得て來なければならぬ筈だが、時としては、却つて古風なものが又再び榮える場合がある。同時に、並行状態が可なり長く續くのも、さうした理由から訣る。此と同じ理くつで、形容詞の活用が略完備し、その色々な變態すら興つて來た時代に、尙古態を残してゐる事を考へなければ、時代文法の研究は無意味である。かう言ふ訣、は形容詞に於いても、いろんな形を派生してゐる時に、尙形容詞語尾の發生時代の姿が、その時代的に合理化せられ乍ら残つてゐる事もあるべき

答だ、と言ふ事を言ひたいのである。譬へば、

なこひそ吾妹　　かづらせ吾妹

ひもとけ吾妹

命死なまし甲斐の黒駒

そこし恨之(?)秋山われは、

つかへ奉れる貴之見れば

と言ふ様な形ならば、呼格として意味は明らかである。

あひ見ずて、日ケながくなりぬ。このころはいかに好去哉ヨケケヤ?　いぶかし。吾妹

の如きは、既に一面呼格であり乍ら、「なつかしき吾兄」といつた意義から差別がつきにくくなつてゐる。此が一段前の形は、その不即不離の状態が明らかでない多くの例に現れてゐる。つまり、普通呼格の上に形容詞がある時、其が總て、文章成分の顛倒したものと解せられて來てゐるが、實はさうなつて來るまでの過程に「なつかし吾兄」が「吾兄なつかし」の氣分的表現でなく、「なつかしき吾兄」の意義を持つた時代があつたのである。つまり、さうした文章上の事實が、實は句或は單語に於ける形式の延長であつたのだ。私は唯この點に、尙幾多の疑問は持つて

ゐるが、併し乍ら、形容詞の終止形「し」の形が、語根から屈折を生じて獨立したと言ふ事の原  
因には、さうした連體句が倒置せられて（今考へるのとは反對に）來、又さうした意識を以て見  
る習慣の生じた爲に、この形に次第に終止としての實感を持たして來たものと言ふ事情をも、考  
へて見なければならぬと思ふ。

○

既に枕詞のある部分まで、その成因を説いた。併し、尙此に關係のある枕詞がある。其は「じ  
もの」の形を語尾とするものである。此「じもの」は、翻譯の上において、明らかに二通りに區  
別出来るものと考へられて來てゐる。

イ、 しゝじもの 鹿兒じもの

馬じもの 犬じもの

鶉じもの 鴨じもの

鳥じもの 雪じもの（露じもの？）

うましもの（——あへ「饗」……）

ロ、 男じもの 牀じもの

と言ふ風になつてゐるが、前者は、その名詞の持つ或傾向を、全然比喩としたもの、後者は、普通「として」と譯して、前の一類の譯語と通ひ乍ら、意味のやゝ違ふ所を出さうとせられてゐるものである。其だけ、元は全然別のものでなく、意義變化した爲に出來たもの、とも考へられる。其には過程として「とこじもの」を置いて見る必要がある。旅行中に草を敷き寝する有様を言つたので、牀の如くとも譯すれば、さうも出來る訣である。一體この詞は、「をとこ」と讀むか「をのこ」と讀むか訣らないものと見られてゐるが、萬葉卷二の二つの用例から見れば、明らかに「烏徳」としたらしく思はれるから、「をとこ」と讀んでよからう。だが、古典は古典その者の中において又、特殊の擬古的態度があり、其から來る所の大きな誤解さへも加はるのだから、幾分は「をのこじもの」と謂つてもよいといふ餘裕は残して置く方が、國語發達史上却つて正しい見方、と言へるのだ。

私の話が、少し長びいたので、今一度前からの考へを、印象的に要約して置く必要がある。形容詞語尾殊に、重要な終止語尾の、獨立或は固定の妥當的な感覺を導いた過程についての考へである。第一、「し」を含んだ語根時代。第二、價格としての用語例に入つた「し」の時代。第三、價格の對象語の脱落した時代。第四、語尾としての「し」の獨立時代、と謂つた假りの區劃を立て

てゐるのだが、今の私にとつては、第一期について、最大な疑問が起つて來てゐる。其で、結局、第二・第三の時代を中心にして論じて來た訣であつた。さうして、其點において可なり必要な件をまだ後廻しにしてゐる。

所謂一類の枕詞の語尾と考へられて來てゐる、「しもの」と言ふ形である。此亦既に述べた「し(否定)何」「らし何」と同じ發生を有するものである。尙言へば、すべての形容詞語尾は、「しもの」の過程を含んで來たもの、と考へられさへするのであつた。さうして、假りに様々な「し何」の形を綜合すると、「しもの」と言ふ形に歸一するのは明らかだ。

若、形式論をつきつめて行くとすれば、「あなにやし えをとこ」「やすみし、大君」などの古い例さへ、「あなにや えをとこ」「やすみし 大君」から更に、領格的用語例の意識を、生じずに居る訣はない。「あなにやの えをとこ」「やすみしの 大君」と言ふ意識を含んでゐない、と誰が言へよう。一方更に進んでは、「や」「ら」「か」「な」などが、すべて體言化する語尾の用をなす如く、こゝにも「……なる物……」「……物……」と謂つた感覺を以て受け入れたと考へられなからうか。

わが待つもの <sup>ナレ</sup> 鳴はさやらず、いすくはし <sup>モ</sup>、くちらさやる

と思つて來ると、やゝ論理一逼に傾くが、「じもの」の出來る道筋も知れる様だ。

「じもの」の慣用の最少いものは、記・紀である。その中、

あをによし 奈良のはざまに、  
 斯々<sup>ツ</sup>武暮能<sup>モ</sup> みづくへこもり、みなそゞぐ 鮎<sup>ワケユ</sup>の若子を あ  
 さり出<sup>ツ</sup>な。ゐのこ(武烈紀)

此「しゝじもの」の用例は、他の枕詞の「しゝじもの」と餘程違つてゐる様に見える。此「しゝじもの」を「みづくへこもり」の、どの部分かにかゝつてゐるやうに、説くのは苦しい。其なら寧、句を隔てゝゐるが、「しゝじもの……あさり出<sup>ツ</sup>な。猪の子」と説けばよい。さう考へると、「をのこじもの」と幾分形が似て來るので、比喩とは遠ざかる。私は一體此「じもの」が歌謠にとり入れられた原因を寧、歌謠その物以外にある、と見て來てゐる。即、歌謠の歴史上において、咒詞(壽詞・祝詞)の古い様式を、長歌が率先してとり入れる様になつた飛鳥・藤原時代から盛んになつたものと見てゐる。此件については別に書いたものがある。此處には其をくり返す繁雜を避けさせて置く。たとへば、可なり新しい例からあげると、平安初期に固定したと見るべき延喜式祝詞にも、其痕跡が見える。

○辭別。伊勢坐……皇吾睦神漏伎・神漏彌命登宇事物類根衝拔氏……(祈年祭)

此は、祈年祭と同様の形式をとる月次祭は勿論、どう言ふ訣か、廣瀬川合祭・龍田風神祭にも用ゐてゐる。而も、「もの」と言ふ語の多く出て來る例として、

○わが地トコロとうすはきいませと進クダマツるみてぐらは、明妙・照妙・和妙・荒妙にそなへまつりて、見

明物止鏡アキムルモノ、翫物止玉モテアソブモノ、射放物止弓矢、打斷物止大刀、馳出物止御馬、……に至るまでに、横山

の如、凡物に置き足らはして……(遷却崇神祭)

が擧げられよう。他の中臣祝詞とは違ふし、齋部祝詞だけに、尠く發想法の古きを保つてゐることも頷ける。此點、同じ様であり乍ら、出雲國造神賀詞は、幾分新しい發想をとつてゐる。

つまり國造家の負幸物と咒詞とを關聯せしめて言ふのに、「もの」の用語例を換へて來てゐる。つまり唯の枕詞のやうにしたてゝゐるのだ。でも尠くとも枕詞として考へる以上、「じもの」に近い用語例と、「……の」と比喻法を採るのと、二つながら並行した方法なる事と合點は行く。

朝日の豊さか登りに、神乃禮ミカド自利、臣能禮ミコノミカド自登御禱ミコノミカドの神寶獻らくと奏す。白玉の大御白髪いまし、赤玉のみあからびいまし、青玉の水江の玉のゆきあひに、……手長テナガの大御世をみはかし、廣に誅堅ツルギツクめて、白御馬の……蹈み堅め……振り立つる事は、耳のいや高に、天下をしろしめさむ事志太米、白鶴クニヒの生御調能玩物登、倭文の大御心も多親タシに、……若水沼にいや若えまし、

すゝぎふるをどみの水のみをちまし、まさびの大御鏡の面をおしはるして見そなはず事のこ  
とく、……しろしめさむ事能志太米と御禊の神寶を擎げ持ちて、神禮自利・臣禮自と……

咒詞に起原を持つ表現法が、思ひがけない程、多く古代祝詞には相當な數はある。而も其方の「頼じもの」と、記・紀の側では「しゝじもの」などが目につく位だ。而もある點では、奈良朝の文法の貯溜池と見られる旨命には、同じ「じもの」でも、特殊な用語例が残つてゐるのである。さうして其が、第一類の比喻表現を含む「じもの」と關係なく、第二類に極めて近いことが考へられるのだ。第二類から第一類への過程に、「牀じもの」を据ゑて見れば、稍解釋がつきさうに思はれる。我々は成立した形容詞活用<sup>ナ</sup>に左右せられることなしに、其以前の形を考へるつもりで、まづ見てゆく必要がある。

○喉<sup>ノド</sup>が臣としてつかへ奉る人等も、一つ二つを漏し落す事もあらむか、と辱<sup>ハ</sup>なみ、愧しみお  
もほしまして、我皇太上天皇の大前に「カシゴシモ恐古之物」シマヒヒ進退<sup>シマヒヒ</sup>匍<sup>シマヒヒ</sup>匍<sup>シマヒヒ</sup>保利……

○汝<sup>ナ</sup>が命きこしめせとのりたまふ御命を「畏<sup>オソ</sup>自物」受賜<sup>ウケタマヒ</sup>理坐<sup>リマ</sup>天食<sup>アメノケ</sup>國<sup>クニ</sup>天下<sup>テンカ</sup>乎<sup>カ</sup>惠賜<sup>オホタマヒ</sup>比<sup>ヒ</sup>治賜<sup>チタマヒ</sup>布間<sup>フマ</sup>爾……  
此等の例を、凡に見ると、萬葉の「じもの」の分化したものと、思はれさうだ。併し、其にしては、あまり飛躍し過ぎてゐると言ふことも、同時に思ひ浮ぶであらう。ともかくも、通例の形容

詞の用語例に馴れた我々には、「いまじきの間」「ましど・ましどき」「われじく」或は又、「おたひしみ」など言ふ形や、

汝爾冠位土賜治賜夫。又此家自久藤原卿等乎掛畏聖天皇御世重氏於母自岐人乃氏自門止波…の如き用語例のあつた事を示してゐる宣命、及び其前型としてあつた幾多の舊宣命並びに、弘仁・延喜以前の祝詞に現れた等の形容詞の様子を、今一度思ひ見る必要がないだらうか。

○ゆふべには、入り居なげかひ、わきばさむ兒の泣く毎に、雄自毛能負ひみ抱きみ、朝鳥の哭のみ泣きつゝ、戀ふれども…吾妹子が入りにし山をよすがとぞ思ふ高橋蟲麻呂

○鳥自物朝立ちい行きて、入り日なす隠りにしかば、吾妹子がかたみにおけるみどり兒の、こひ泣く毎に、……………男自物わきばさみもち、……………且はうらさび暮し、夜は息づき明し、なげゝどもせむすべ知らに、戀ふれども、逢ふよしをなみ、……………石根さくみてなづみ來し……………

○同じく。……………みどり兒のこひ泣く毎に、……………烏德穗自物わきばさみもち、……………晝はも……………夜はも……………なげゝども……………こふれども、……………石根さくみてなづみ來し……………

(右二首、柿本人麻呂作)

○おもがたの忘れてあらば(るとならば)、あちきなく、男士志物屋戀ひつゝ居らむ

前の三つの例は、若し「をとこじもの」が、普通考へる様にかゝつてゐるか、疑問だから、稍餘裕を置いて考へてゐた。すると、「戀ふ」と言ふ語にかゝつてゐる様にも見える。だが一方、「如く」と一步の差ある「なるに」「として」など言ふ反對意識を含んで來たものもあることは、否定出來ない。さうした處から、第一類の「じもの」が出來たのであらう。畢竟形容詞の「し」の本來持つた所の「し物」の義が、語となつて現れて來たものと言ふことが出來よう。尙一應考へて見ると、さうした古い「じもの」を以て言ふ固定した表現法があつて、咒詞・宣命・祝詞の表現法の古式としてくり返されてゐる間に、新しい文學が、其様式をとり込み更におし擴げた。其で、類例の少かつた「じもの」が次第に展開して行つて、第一類を生み出したものと思はれる。たとへば、「畏じ物」の形を延長すると共に、其内容をさのみ變化することなしに、効果を表すには、枕詞の方法が影響したであらう。前にあげた第一類は凡、「かしこじもの」の具體化ではないか。悉く、從屬・歸服・謙遜などの様子を示してゐるのが、其證據である。「鶉じもの」「犬じもの」と謂つても、結局「かしこじもの」の枕詞化ではないか。其と共に、形容詞意識を盛んに持ちはじめた時代だけに、「じもの」「じ」がさう言ふ方向に力を持ち出してゐる。今すこし推察を附

け加へることが出来れば、「かしこじ物」「かこじもの」の類音聯想が、更に「しゝじ物」を案出せしめたとも言へる。「馬じもの」と言ひ、「鴨じもの」と言うても、皆降伏・奉仕の形容に用ゐられてゐる。

「じもの」の語原については、「其物」「<sup>ツ</sup>状物」など言ふ印象分解説はあるが、其では「もの」の説明を閑却してゐる。私は思ふ。「もの」はやはり、靈魂の義である。「かしこじもの」は「畏し靈」で、其威力によつての義を含んで居り、「をとこじものは」<sup>ヲトコジモノ</sup>壯夫靈によつて、<sup>ユビ</sup>招魂をすると言ふ咒詞的な用語例があつたものと見る。意識が變じて、畏ければ、畏しとして、壯夫なれば、壯夫としてなど言ふ風に感じられ、其が更に、新しい民間語原を呼び起したものと見える。併し其徑路にあるものとして、遷却崇神祭祝詞・出雲國造神賀詞を見るがよい。物質・靈魂を比喻或は象徴としてゐることが知れる。同時に、「……の靈の表現としての」、「……の靈の寓りなる」と言ふ古代信仰が見えて居る。

私は、いろくの方角から形容詞語尾「し」の發生を説かうとした。さうして尙言ひ残した事が多い。最心残りなのは、どうしても「し」が語根の一部と見られるものゝ多いこと、亦もつと

大切な語根の性質の論を決定した基礎の上に、此論は立つ筈だつたのだ。其が、毫も出来て居ない。其上未練を添へれば、此論での、主題とした「し」の傾格語尾としての成立をすら、存分に言ひ立てる事の出来ないで丁うた事である。

唯、私の學問を長く慈愛の目で瞻續けて来て下された金澤先生は、かうした論文からも、書かれてない結論を見出して下さること、信じもし、甘えもして、文をとちめることを許して頂くのである。